Ⅳ　社会　２年次の成果と課題

１　成果

(1)　獲得した社会的事象に関する知識や「見方・考え方」を自覚するための省察の工夫

省察の場の工夫により，得られた知識を整理したり，学習問題を解決するに当たって「見方・考え方」を自覚的に働かせる姿が見られたのが成果である。

１年次の取組の結果，単元や１単位時間での省察の場をどのように社会的事象の「見方・考え方」の自覚につなげればよいかについての手立てが課題となった。そこで，省察につながる手立てを工夫し，獲得した社会的事象に関する知識，新たに得られた「見方・考え方」を自覚することを目指した。そのために，自分の学習の足跡をたどり，変容を自覚できるような手立てを講じた。

第５学年の「発見！日本の気候の特色」の単元では，白地図の活用を試みた。毎時間の終末に，学習したことをもとに気候区分する活動を取り入れた。個々の活動とすることで，子どもたちそれぞれが本時の学びを見直す，気候を区分し直すなど，これまでの自分なりの気候区分の仕方が本当に正しかったのだろうかと考え直す姿が見られた。また，単元を通して繰り返し学習過程に位置付けたことにより，学習の足跡が蓄積され，それを比較することにより子ども自身が自分の変容を実感することができた。

第３学年の「わたしたちの秋田市」の単元では，学習計画とふり返りを１枚の用紙に記すようにし，獲得した知識や思考の変容を自覚できるようにした。これまでに問題解決に当たってどのような「見方・考え方」をしたのかをふり返ることで新たな問題解決の手がかりとする姿が見られた。

このことから，学習の終末時における省察の場を工夫することは「見方・考え方」を自覚する上で有効であると言えよう。

(2)　社会的事象の認識の段階を踏まえた単元構成の工夫

社会的事象の認識の段階を，①事実認識，②関係認識，③意味認識の３段階とし，これを踏まえて単元を構成することにより，子どもたちが新たな問いを見いだすことや「見方・考え方」を働かせる姿につなげることができた。

①の段階は資料から分かる事実を捉える段階である。資料には写真，表やグラフなどの統計資料，地図，見学記録，年表等，種々あるが，そこから見える事実を捉えるようにする。ここでの捉えが②，③の段階につながるので，正確な認識が必要となる。資料等から分かる事実を捉える際に，子どもはともすると事実に「○○なのではないか」といった推測を付加してしまいがちである。第３学年の学習では，単元のはじめに写真等の資料から見える事実は何かということを捉えることを丁寧に行うようにした。その上で，②の段階として，見いだした事実の関係を考えるようにすることで，③の段階につながる見える事実から見えないことを思考する社会的事象の認識の仕方の基本を身に付けるようにした。第５学年の「発見！日本の気候の特色」の単元では，気候を気温と降水量から特徴付け，その原因となる要素を緯度や地形，季節風の影響として理解を図った。そこで，各地域の雨温図の他，梅雨や台風，季節風にはどのような影響があるのかということを単元のはじめに位置付けると共に，地図帳を常に参照できるようにした。②の段階では地形と風向による降水の関係を捉えた上で，それぞれの地域の気候を，捉えた事実を基に関係付けていった。そして，①と②を繰り返しながら認識を深め，日本の気候区分を視点を結合して捉えるという③の意味認識につなげていくことができた。また，問題解決の際に，どのように考えたらよいか，という問いかけを行い，「見方・考え方」を働かせられるようにした。そして，２市の比較の結果を受けて，他の地点にも広げて概念化するなど，段階を踏まえた学習の組み立てにより，「見方・考え方」を自覚的に用いる力も段階的に高められた。

２　課題　「見方・考え方」を効果的に働かせ，学びをつなぐための省察の在り方

「見方・考え方」が適切であるかを見つめ直す省察の場の位置付け，これまでの学びとこれからの学び，自らの学びと他者の学びをつなぐための省察の在り方が課題である。

問題を解決する活動の際に，どのような「見方・考え方」や方法で解決を図るか，また，その方法が適切かどうか，さらには問題そのものが適切であるかどうかを，「対話」等を取り入れながら省察する活動を位置付けるなどが考えられる。そして，その方法を自分たちで選択・判断し，解決に向かっていく子どもを育てるためにどのような手立てを講じるとよいのかを探っていきたい。